

オオカンガルーにおける育児嚢観察のための馴致状況と得られた事柄について

柴田 枝梨

金沢動物園におけるオオカンガルーの育児嚢内観察を目的とした馴致の進捗と、観察から得られた生理・繁殖に関するいくつかの知見を整理した。当園での育児嚢内の写真・動画記録は、主に 2011 年以降からデータ保存されている。その後、担当者交代や繁殖制限、機材性能の問題からデータ収集が断続的となっていた。2022 年の繁殖再開に向け、2021 年秋より展示群雌個体を中心に育児嚢接触の馴致を開始した。2025 年 7 月時点で展示群 16 頭のうち多くが「育児嚢内への接触」「体勢の維持」「小型カメラの挿入」が可能となった。また、馴致を日常管理の一環として習慣化することにより、飼育担当者を変更しても継続して観察が行えるようになった。

観察により得られた知見は、主に以下の 4 点である。①乳頭の変色や腫脹など乳腺腫瘍を疑う所見が複数個体で確認され、高齢個体では進行が早い傾向が見られた。変色が必ず腫瘍化するわけではないが、繁殖対象からの除外と継続的な観察が重要と考えられた。②育児中でない個体や未経産個体でも不規則な泌乳が認められ、ホルモン動態との関連が示唆された。③育児嚢内の湿度、分泌物、乳頭の変化が発情・出産兆候として有用である可能性が示されたが、個体差が大きく指標化には追加データが必要である。④嚢児の成長過程では口腔構造や開眼時期、四肢発達が詳細に記録できた。生後数日齢での雌雄判別の可能性が示され、繁殖計画に有用な情報となった。

今後は、観察可能個体のさらなる拡大、育児嚢馴致を基盤とした採血などへの発展、獣医師による無保定診察の実現を目指す。また、蓄積データを解析し、繁殖計画やペアリング判断に活用を進めていきたい。